青年海外協力隊「現職教員特別参加制度」派遣教員レポート（平成２０年９月分）

氏名（国内所属校）：　森下　理奈　（尾道市立土堂小学校）
現地勤務先：カンボジア、バッタンバン州小学校教員養成校

援助とは・・・？

私の活動先に対して、広島県の皆様からたくさんの楽器を贈っていただきました。6 月からは付属小学校でも音楽クラブを結成し、楽器を活用させていただいています。初めて楽器や楽譜に触れた子どもたちでしたが、毎日 1 時間の練習を重ね、4 ヶ月経った今では鍵盤ハーモニカやリコーダーで 15 曲以上演奏できるようになりました！

新しい曲の楽譜を見て自力で演奏しようとしたり、クラブが終わったあと習った曲を口ずさみながら帰ったり、新しいメンバーに楽器の弾き方からクラブのきまりまで甲斐甲斐しく教えたり…、そういう姿を見るとうれしくなります。

「聖者の行進」などのスタンダードな曲や日本の音楽の教科書で扱う曲は CD があるので、曲にあわせてリズム打ちしたり、メロディーが弾けるようになった後に合奏用として使ったりしています。

これらは、楽器や CD を援助してもらったからこそできた活動です。

私は以前、援助する際には、その国・その場にあるものでできることでないと根付かないし、その人たちのためにならない、と思ったことがありました。音楽に関していうと、鍵盤ハーモニカなど外から持ち込んだ楽器で西洋音楽を教えるのではなく、現地の伝統楽器や手作り楽器でカンボジアの曲を演奏するのがいい、という考えです。

↑鍵盤ハーモニカで「キラキラ星」が弾けるようになった後、DVD で吹奏楽版「キラキラ星」の演奏を観ました。じーっと画面を見つめ、聴き入る姿が印象的でした。

しかし、日本から送られてきた楽器を楽しんで弾き、CD や DVD によって意欲を増し、楽譜を見ながらカンボジアの曲のみならず、日本や世界の曲を演奏し自分のものにしていく彼らを見ていると、外から持ち込む援助もそう悪いものではないのでは、という気がしてきました。

楽器の他にもカンボジアではたくさんの援助物資を目にします。活動先だけを見ても、校舎から机、いす、黒板、図書に文房具とあらゆるものが外国からの援助によるものです。

援助をする側は、ユネスコ・ユニセフなど国連の各組織、各国政府、NGO、個人…、と様々で、“ それぞれがそれぞれ良いと思ったこと ” をしています。

しかし、私は今、「援助」の難しさを感じています。

全ての物事にプラスの面とマイナスの面があるように、「援助」にも両面あるようです。